

Suttanipāta に見られる kāma の両義性について

安 藤 淑 子

1. はじめに

Suttanipāta (以下, Sn)¹⁾ における kāma の語義は、従来「欲望」或いは「欲望の対象」と訳出されてきた。また, Pāli の辞書では, Rhys Davids [2004: 203] が kāma に (1) Objective, (2) Subjective の二つの面があることを指摘し、前者は「感覚的な喜びの対象 (an object of sensual enjoyment)」を表すとしている。Cone [2001: 665] も同様に, kāma の語義の中に「喜びの対象 (the objects of pleasure)」が含まれるとしている。このように kāma は両義性を有する語であると見なされてきたのであるが、本研究では両義の内実を (1) 「欲する」という心理過程全体を表す kāma と、(2) この心理過程によって生ずる外的な現象である「欲せられたもの」としての kāma の二類であるとする。

以下, Sn 原典中に現れる個々の kāma がどのように解されるべきかであるかという点について考察を行うこととする。

2. 思想から見た kāma

Sn には、仏教興起当時広く共有された「無所有」思想が説かれており、これに並行する形で「kāma の棄却」に関連する教説が現れる。Sn に見られる「無所有」思想とは次のようなものである。なお、下記の用例のほか、Sn, 355, 777, 951, 1050, 1056, 1059, 1094, 1100 偈等もこれに該当する。

Sokaparidevamaccharaṃ / na jahanti giddhā mamāyite, / tasmā munayo pariggahaṃ hitvā acarimṣu khemadassino. (Sn, 809) 我がものと思うものを貪り求める人は、憂いと悲しみと物惜しみを捨てることがない。それゆえに諸々の聖者は所有物を捨てて行き、安穩を見たのである。

Sabbaso nāmarūpasmim̐ yassa n' atthi mamāyitaṃ, / asatā ca na socati, sa ve loke na jīyyati. (Sn, 950) 諸々の事物に対してわがものという思いがあまねく存在しない人は、無所有を悲しまな

い、彼は世間において実に失うことがないのである。

一方、「kāma の棄却」に関する用例は次のようなものである。なお、下記の用例のほか、Sn, 773, 823, 857, 948 偈等もこれに該当する。

tasmā jantu sadā sato kāmāni parivajjaye, / te pahāya tare oghaṃ nāvaṃ siñcitvā pāragū ti. (Sn, 771)
それゆえ、人は常にこのことを心に留めて kāmā を回避すべし。それらを捨てて暴流を渡るべし。舟の水を汲みだして彼岸に到る（ものとなれ）と。

“Ākiñcaññaṃ pekkhamāno satimā / Upasīvā ti Bhagavā / ‘n’ atthi’ ti nissāya tarassu oghaṃ, / kāmeha pahāya virato kathāhi / taṇhakkhayaṃ nattamahābhipassa.” (Sn, 1070) 「ウパシーヴァよ、注意力が備わった人は、無所有を観察しつつ『存在しない』(と思う) ことによって暴流を渡るべし。kāma を捨て諸々の疑惑を離れ、渴愛の消滅を昼夜に見よ。」と世尊は言った。

“Sabbesu kāmesu yo vītārāgo / Upasīvā ti Bhagavā / ākiñcaññaṃ nissito hitva-m-aññaṃ / saññāvimokhe parame vimutto, / tiṭṭheyya so tattha anānuyāyi.” (Sn, 1072) 「ウパシーヴァよ、あらゆる kāmā に対する貪りを離れ、無所有によって他のものを捨てた人、その人は最高の有想の解脱において解脱した者であり、戻ることなくそこに留まるだろう」と世尊は言った。

「無所有」思想と共に現れる「kāma の棄却」は事物への執着を断つことを説くものであり、この点から見て「kāma の棄却」における kāmā とは対象事物、すなわち「欲せられたもの」としての kāmā であると考えてよいだろう。

3. 表現形式から見た kāmā

Sn には「kāma に対する〈心の働き〉」という表現形式が頻繁に現れる。この表現形式は、さらに拡張されて「kāma に対する〈心の働き〉を調伏する」という形で用いられることもある。

“Kāmesu vinaya gedhaṃ / Jatukaṇṇi ti Bhagavā / nekkhammaṃ datṭṭhu khemato, / uggahītaṃ nirattaṃ vā mā te vijjittha kiñcanaṃ. (Sn, 1098) ジャトゥカンニンよ、出離を安穩であると見て kāmā に対する貪りを制しなさい、と世尊は言った。得られたものも捨てられたものも、何ものもあなたに存在してはならない。

Rāgaṃ vinayetha mānusesu / dibbesu kāmesu cāpi bhikkhu / atikkamma bhavaṃ samecca dhammāṃ / sammā so loke paribbajeyya. (Sn, 361) 比丘は、人間や神々の kāmā に対する貪欲を調伏すべし。そしてまた生存を超克し、法を知って正しく世間を遍歴するがよい。

ここでの kāmā は、いずれも心の働きが向けられる「対象」としての kāmā であり、「欲せられたもの」としての kāmā であると解することができるだろう。

該当する用例には、「kāma に対して貪求する人々 (kāme yo naro anugijjhati (Sn, 769))」, 「過去の kāma に対する貪り (kāme purime ca jappaṃ (Sn, 773))」, 「kāma に対する貪り (kāmesu giddhā (Sn, 774))」, 「kāma に対する望みがない (もの) (kāmesu anapekkhino (Sn, 823))」, 「kāma に対する執着 (kāmesu gathitā (Sn, 823))」, 「kāma に対する望みがない (もの) (kāmesu anapekkhinaṃ (Sn, 857))」, 「kāma に対する熱望がない (kāmesu nābhigijjheyya (Sn, 1039))」, 「kāma に対する貪りを遍く離れ (sabbesu kāmesu yo vītārāgo (Sn, 1071, 1072))」, 「kāma に対する貪りを制する (kāmesu vineyya gedhaṃ (Sn, 152))」, 「kāma に対する望みがない (もの) (kāmesu anapekkhinaṃ (Sn, 166))」, 「心は kāma に対する望みがない (kāmesu nāpekkhate cittaṃ (Sn, 435))」等がある。

4. 文意から見た kāmā

さらに、次に示す用例中の kāmā は、文意から明らかに「欲せられたもの」としての kāmā と解される。

kāmaṃ kāmayaṃānassa tassa ce taṃ samijjhati, / addhā pītimano hoti laddhā macco yad icchati. (Sn, 766) kāmā を求めつつある人が、もしそれ (を得ること) に成功するならば、人は欲しているものを得て心喜ぶものとなる。

tassa ce kāmayaṃānassa chandajātassa jantuno / te kāmā parihāyanti, sallavidhho va ruppati. (Sn, 767) これら求めつつあるものへの欲求が生じたなら、kāmā が失われると (人は) 矢に射られたように苦しむ。

同様に、次の Sn, 60 偈, 769 偈の kāmā は偈の前段に示された具体的な対象事物を指している。

puttañ ca dāraṃ pitarañ ca mataraṃ / dhanāni dhaññāni ca bandhavāni ca / hitvāni kāmāni yathodhikāni / eko care khaggavisāṇakappo. (Sn, 60) 妻子、父母、財産、穀物、親族、(その他) あらん限りの kāmā を捨てて、一角の犀のようにただ独り歩め。

khettaṃ vatthuṃ hiraññaṃ vā gavāssaṃ dāsaporisaṃ / thiyo bandhū puthu kāme yo naro anugijjhati, (Sn, 769) 田畑、あるいは宅地、黄金、牛馬、奴僕、女達、親族達 (といった) 数多の kāmā を人々が貪り求めると、

5. 語形から見た kāmā

Sn に現れる kāmā の語形は、766 偈²⁾ 以外すべてが「複数形」という顕著な特徴を有している。これは次の用例のように、kāmā が他概念と併記される際にも変わらない。

kāmā te paṭhmā senā, dutiyā arati vuccati, / tatiyā khuppiṭṭā te, cattuthī taṇhā pavuccati, // (Sn, 436)
 あなたの第一の軍隊は kāmā (pl.) であり、第二は不快 (arati (sg.)) であり、第三は飢渴 (khuppiṭṭā 単複同形) であり、第四は渴愛 (taṇhā 単複同形) であると言われる。

一般的に、「複数形」とは個の集合体を意味する語形である。したがって、Sn における kāmā もまた個々の kāma の集合体を意味していると考えられる。このことは、Sn における kāmā が抽象的な概念というよりも、むしろ具体性を持った諸現象として把握されていたことを示しており、このことは Sn において「欲せられたもの」としての kāmā の用法が多数を占めていることとも密接に関連していると考えられる。

6. まとめ

従来、kāma には二種類の語義の存在が指摘されてきた。本稿ではこれを (1) 「欲する」という心理過程全体を意味する kāmā と、(2) 心理過程によって生じる対象としての kāmā (「欲せられたもの」) に分類し、これを基に Sn に現れる kāmā の語義を、思想、表現形式、文意の三つの側面から検証した。

その結果、Sn の kāmā はその多くが「欲せられたもの」としての kāmā、すなわち心理過程によって生じた外的な現象としての kāmā を意味していることが明らかになった。また、このことが「複数形」という kāmā の語形選択に密接に関連していることを指摘した。

1) 本稿では、PTS 版の Suttanipāta を用いる。なお、紙面の都合上原典の改行は「／」で示している。

2) Norman は、766 偈の kāmā を単数形とは見なさず、〈男性・対格・複数〉を示す Pāli の特殊な用法の一事例とする見方を示している (Norman, (2001, 163))。

〈参考文献〉

Cone, M. 2001. *A Dictionary of Pāli*. Oxford: The Pāli Text Society.

Norman, K. R. (Tr.).

2001. *The Group of Discourses (Sutta-Nipāta)*. Oxford: The Pāli Text Society.

Rhys Davids, T.

W. 2004. *Pāli-English Dictionary*. Oxford: The Pāli Text Society.

〈キーワード〉 kāmā, 語義, 両義性, Suttanipāta

(佛教大学大学院)